

自閉症スペクトラム障害の児童への造形活動の実践 (4) : 表現と集団活動を促す造形と遊びのサマースクール

著者名(日)	安田 悟, 岡田 智
雑誌名	共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要
巻	19
号	3
ページ	73-88
発行年	2013-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002924/



「自閉症スペクトラム障害の児童への造形活動の実践 (Ⅳ)」 —表現と集団活動を促す造形と遊びのサマースクール—

安田 悟¹⁾ 岡田 智²⁾

I. 活動の目的

「造形と遊びのサマースクール」の活動は、共立女子大学家政学部児童学科付設の「発達相談・支援センター」のなかで、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD) やそれに類する困難のある児童を対象に造形と遊びを取り入れた教育支援活動として企画し、実施したものである。参加した子どもたちが楽しく取り組むことの出来る造形と遊びを取り入れ、その活動内容に改良や工夫を施し、さらに集団造形としての新しい企画を加えながら、2008年以來、毎年実施してきた (安田・岡田・山田, 2009, 安田・岡田, 2010, 安田・岡田, 2012)。4回目となる今回も、障害特性に応じた支援を織り交ぜ、個の表現特性を生かしながら、さらに集団としての協同・共有意識を育む造形活動を組み込み、個に留まらない表現を目指す活動を計画し実践した。今回は、東京都立 K 公園の屋外広場と公園内の体育館施設において、自然素材を使った遊びや自然空間の中での協同活動の展開を試みた。

II. 「造形と遊びのサマースクール」活動の概要

1. 対象児と支援スタッフ

(1) 参加児

東京都公立小学校の特別支援教育担当教員からの紹介で募集した幼稚園年長児から小学6年までの計15名の男女児童である。これらの参加児童の多くが、発達障害専門の機関で ASD または発達障害等の診断がある。参加した15名の子どもたちは、学年、性別、認知・社会性の能力水準を考慮し、3名ごとの5グループに分けての活動になった。

(2) 支援スタッフ

支援スタッフは、教員スタッフ2名 (造形教育担当教員, 発達障害臨床担当教員) と学生スタッフ9名 (大学院生1名, 大学4年生8名) である。

学生スタッフを各グループにリーダーとして1名ないし2名を配置した。また、リーダーである学生スタッフは、今回の主な活動となる「パラバルーン制作」, 「立体凧制作」, 「宝探し遊び」など

1) 家政学部児童学科

2) 北海道大学教育学研究院

「自閉症スペクトラム障害の児童への造形活動の実践（Ⅳ）」

の各活動の担当スタッフとして全体の進行や指導を行うリーダーとなり、それぞれが担当する活動の計画を立て、素材や用具を準備した。実施当日は、各グループの移動や活動参加への促し等、受け持ちの子どもについては常に目を配り、配慮を含めた補助活動をおこないながら造形や臨床のスキルを学んでいくことになった。

2. 活動のながれ

(1) 1日目のながれ

- ・集 合：午前9時半
- ・自由時間：各自会場に集合し、色々な遊具を使つての自由遊び。(大ホール)
- ・開 会 式：挨拶、活動についての説明、班分け及び自己紹介。
- ・造形活動：「パラバルーン描画」活動…巨大な綿布にペイント活動を行う。(屋外広場)
- ・昼 食：グループごとに持参した弁当で昼食。(小ホール)
- ・自由時間：さまざまな遊具を使つての自由遊び。(屋外広場)
- ・遊び活動：「リスと大木」…号令で3人組になる簡単なルールのある遊び。親和性や協調性を高めることがねらい。
「宝探し遊び」…宝が印された地図を見ながら公園内の広場を歩き、「宝」を見つける。
この「宝」は2日目の「お土産作り」活動の素材となる。
- ・振り返り：まとめと明日の準備についての説明。(小ホール)
- ・解 散：午後15時半、スタッフは保護者に子どもの様子の報告を行う。

(2) 2日目のながれ

- ・集 合：午前9時半
- ・自由時間：様々な遊具を使つての自由遊び。(大ホール)
- ・始まりの会：挨拶、本日の活動についての説明。
- ・遊び活動：「インパルス」…輪になり順番に動作などを伝達していくゲーム。
「牛馬ゲーム」…リーダーの話を集中して聞き取り、動く。
「ペア探し」…カードや紐などを拾い合わせて、ペアになる相手を探す。
- ・造形活動：「立体凧制作」…各自、発砲スチロール板に装飾し、グループ毎に立体凧を組み立てる。完成後に作品のコンテストを行う。
- ・昼 食：各班担当のスタッフとともに持参した弁当で昼食。(小ホール)
- ・自由時間：色々な遊具を使つての自由遊び。
- ・遊び活動：「立体凧遊び」…班ごとに制作した立体凧を揚げて遊ぶ。(屋外広場)
「パラバルーン遊び」…ペイントしたパラバルーンを使って全員で遊ぶ。
- ・お土産作り：1日目の宝探しで獲得した材料を使って写真立てを作る。(小ホール)
- ・閉 会 式：2日間の振り返り、参加証書授与。

・解 散：午後16時、スタッフは保護者に子どもの様子の報告を行う。

以上が2日間の大きなながれであるが、各ステージでの準備と片付け、そして各実施場所への移動などについての子どもたちへの指示は、時間の配分を含めて状況に応じた柔軟な対応が必要であることを事前に申し合わせていた。また夏の暑さへの対策として休憩や、水分補給の時間は状況に応じながら、頻繁に設けた。

3. 障害特性に応じた配慮

(1) 環境設定への配慮

活動場所は、東京都立K公園内にある市立体育館（大ホール及び小ホール）と屋外広場である。活動拠点としての屋内施設の確保は、天候の変化に対応することや材料と用具の保管等が必要であった為である。これら屋内施設は本活動以外にも昼食・休憩場所、準備物等の保管場所として使用したが、他の利用者との時間割の兼ね合いに於いて、その都度の移動が必要であった。そうした屋内外活動地点への移動については子どもたちの動向を包括的に捉え、使う材料や用具の運搬についても活動の一部として組み込むことで、子どもたちが役割を持ちながら活動への参加を意識できるようにした。

屋外施設や体育館施設の使用ルール、移動ルールについては、ポスターや個別教示などで具体的に明示し、子どもたちにも良く伝わるようにした。

(2) 制作工程での配慮

①日頃体験することの少ない素材に触れられるように

屋内外での集団行動への配慮に加え、日頃体験することの少ない素材や大きさに触れるという貴重な経験を経て、充実感や満足感、達成感を感じ取れるように制作の作業工程を設計した。

②個の表現の保障

自己の発揮できる描画表現などは、そのテリトリーを保障し、個人が自由に表現できるように時間配分や表現空間に配慮した。そうした造形表現を広いスペースに於いて制作出来るように設定したうえで、個別の対応として消極的な子どもや取り組みが持続しない子どもには、時間をかけながらスタッフの促し等の支援が出来るようにした。また、アイデアなどが思い浮かばずに立ち往生している子どもには、いくつもの表現の在り方をスタッフが例示したり（モデルリング提示）、イメージが膨らむようにスタッフからも声かけや対話を試みたりした。

③「結果としての集団造形」への展開

ASDをもつ子どもたちは日常の学校生活や友達との交流について、自己意識のなかで少なからず違和感を覚えている。サマースクールの活動では自己を発揮しつつも、全体で、あるいはグループで仲間とのつながりを意識した活動の場にする必要があるであった。子どもたちが身近な範囲で出来る個別的な作業から、全体の作業へ移行していけるように段階を追って区切り、それぞれのステージで徐々に共同目標を持つことができるように活動を設定した。子どもたちは意図せずに、結

果的に集団造形へと展開したことになった。

(3) 活動時の配慮

本活動では日常生活のなかで集団活動や人間関係において否定的な経験を多くしている子どもたちが、仲間やスタッフと共に自発的に楽しい体験を重ねていけることを目指した。さらに子どもたちが持つマイペースさやこだわり、衝動性、処理の遅さ、興味関心の偏り、感覚過敏などの障害特性も造形表現においては個の創造性を発揮する重要なファクターであり、それらの特性でさえも尊重されるような支援体制としての認識をスタッフ間で共有しながら活動に臨んだ。障害特性に対する配慮としては、視覚支援、環境や活動の構造化、ルールやスケジュールの具体化や見通し、グループリーダーによる個別的支援等（安田・岡田・山田、2009）を心がけた。

Ⅲ. 造形活動の経過と考察

本稿では、主に造形活動の流れと子どもたちの様子を報告する。屋内施設を拠点としての活動に加えて、屋外活動では自然環境を取り入れながら、広い空間と風（空気）を意識的に捉えられるものをテーマとして造形活動を計画した。「自然空間を活かした造形遊びであること」、「ダイナミックで開放的な活動であること」、「光や風などを取り入れたものであること」が考慮すべき点であった。

1. 「パラバルーン」活動

(1) 計画と準備、活動内容

パラバルーン制作の素材として白の綿布 1.9 m×7 m を 4 本購入し、縫い合わせて 7.6 m×7 m の長方形にした。パラバルーンとしての遊び活動に堪えられるよう、緊ぎ目は二度縫って補強し、布の四辺に沿っても二重に縫い込みその部分の強度を上げた。また、子どもたちが遊び活動でパラバルーンを持ちやすいように、そして持つ位置の目安になるように、布製の「取っ手」（長さ 10 cm×幅 2.5 cm）をバランス良く一定の間隔で縫い付けた。

〈カプセル転がしペイント〉

描画活動の始めに、全員でその「取っ手」を持ってパラバルーンを広げ、その中へ様々な色の絵具を入れた球（直径 5 cm）のカプセルを投げ入れ、パラバルーンを持ち上げて傾けたり、波打たせてカプセルを跳ね上げたりすることで、カプセルにある数個の穴から色が迸り、その痕跡が生まれるという活動を計画した。この活動では、カプセルの転がった跡が様々な折り重なった色として目に見える面白さや、参加者全員で協力して布を動かすことで協働性を意識することがねらいになる。

この活動を行うための下準備として、まずカプセルの大きさ及びカプセルにある穴について、ちょうど良い条件のものを市販カプセルから選別し探っていった。またカプセルに入れる適正な絵具の種類と濃度についても試行を重ね、レボカラー絵具：水 = 1：1 の割合が適した溶液濃度として

判明した。そして本番の活動でカプセルに入れる色の種類は、赤・オレンジ・ピンク・黄・緑・青・肌色の7種類を用意し、カプセルへの注入は、スポイト容器を使いながら実施当日の準備段階で手早く入れられるようにした。カプセルの数は各色3個以上になるように予備を含めて25個用意した。

次に布製パラバルーンへのペイント活動として以下の活動を計画し、使用する描画材料や用具を準備した。ペイント活動に使う絵の具は、カプセルにも使ったレボカラー絵具を使用することにした。レボカラー絵具は綿素材の布にも色良く付着するが、水性の絵具であることから衣類や肌に着いた場合は、洗い落とすことができる絵の具である。

〈スタンプ・ペイント〉

手の平や足の裏にレボカラー絵具を付けてスタンプ・ペイントする。これは、日頃経験することのない体を使った描画方法を体験することが目的である。手足につけた絵具を体全体で思い切りスタンプ・ペイントすることで解放感が生まれ、楽しさを共有することや、重なり合う表現からは個の表現のこだわりに固執しないものが生まれることが期待できる。また、ハート型や星型など様々な形に切り取ったスタンプ用スポンジも用意した。

〈ローラー・ペイント〉

手足に直接レボカラー絵具を付けることに抵抗を感じる子どもがいることを想定し、柄のついた幾種類かのスポンジローラーを用意した。スタンプ・ペイントとローラー・ペイントの為のパレットとしてステンレス製バットとアクリル樹脂性のヘラを10組用意した。

〈ドリッピング〉

カプセルやパレットへの色補充用に使っていたスポイト容器（注入ノズル付洗浄容器ポリエチレン製500ml）を直接用いた。スポイト容器から手足に直接絵具を付けたり、パラバルーンの上に直接ドリッピングも出来るように、あらかじめ各色のスポイト容器を準備し、中に入れる絵具も多めに作っておいた。

〈油性マーカーペンその他〉

その他、手の型取りや自由な描画の為に油性マーカーペンを用意した。子どもたちがペイントや描画した箇所の近くに、マーカーペンで自分のサインをすることにした。

手足を拭いたりシートの汚れを拭いたりするために多量の雑巾と4個の水バケツを用意した。活動場所は、水場が近い野外広場スペースを確保した。

(2) 「パラバルーン」の活動経過

活動の初めにポスターを使いながら活動内容や流れを分かりやすく説明していった。子どもたちは活動のひとつひとつに注目し、パラバルーン活動については大きな四角い布製のパラバルーンを使うことや、その白い布にスタンプなどの様々な方法でペイントすることなどに興味を持った様子であった。

そして屋外の活動場所へ移動する際の気を付けることを申し渡し、各自で持ち物（水筒、タオル）を確認した後、全員で手分けしながらパラバルーン用の大きな白い布や数枚のブルーシート、

それと絵具等の描画材料や用具を、屋外の活動場所まで運んだ。

水場がある広場に到着した後、木陰にまずブルーシートを一枚敷き、そこを休憩場所や荷物の置き場等にした。木陰を作っている大きな木の幹にパラバルーン活動の手順を解かり易くイラストで表したポスターを巻きつけて、子どもたちがいつでも見られるようにした。さらに隣接する場所にブルーシートを4枚繋げて敷き、布製パラバルーンをその上に広げて描画活動の環境を整えた。

パラバルーンを全員で広げる場面では、下に潜ったり端を持って上下に動かしたりして遊ぶ子どももいて、真っ白で大きなパラバルーンを目の前にして興奮している様子が伺えたが、高学年の子どもたちは低学年の子ども達を促しながら、パラバルーンを広げる作業等に積極的に協力していた。（パラバルーン描画活動）

レボカラー絵具が入ったカプセルを配った後、穴を塞いでいたテープを剥がしてリーダーの掛け声とともに、一斉にカプセルをパラバルーンの上に投げ入れた時には、歓声が上がり、手を上下に動かして転がるカプセルの動きと進む絵具の色を楽しんでいた。（図1）

大きなパラバルーンを中心ばかりにカプセルが集まっているという子どもの気づきから、声を掛け合ってパラバルーンを斜めに傾け、カプセルが転がって端の方にも絵の具が着くようにしたこと等から、子どもたちがカプセルから出る絵の具の軌跡に注目していることや、軌跡をつけるために仲間と協力して活動を行っている様子を見ることができた。このカプセルでの活動はしばらくするとカプセルの絵の具がなくなってしまう、軌跡を描くことができなくなってしまうことから、予定より早く切り上げることになった。（図2）

そして次の活動である手足やスポンジでスタンプ・ペイントをする方法と、スポンジローラーを使ってペイントする方法をリーダーが説明した。最初はスポンジローラーでのペイントやスポンジ型を使ったスタンプ・ペイント（図3）を多く試みていた子どもたちだったが、思いきって足の裏に絵の具をつけて歩く子どもがいたことから、他の子どもたちも次第に手や足にレボカラー絵具をつけてパラバルーンの上に入っていった。足の裏に絵の具をつけて声を上げながらパラバルーンの上を走る子どもがいたり、手にも絵の具をつけて側転をしたり、高跳びをしたりしながらペインティングする子どももいて、予想していなかった子どもたちの様子を見ることができた。子どもたちは野外の解放感のなかで、のびのびとダイナミックに色絵具でのペイントを楽しんでいる様子であった。（図4）

スポンジ型を取り入れたスタンプ・ペイントでは、用意されていた形だけのスタンプではなくスポンジを組み合わせてイナズマの形にするなど、組み合わせの工夫から別の形を生み出していくというような、独創的に展開していく子どもの様子を見ることもできた。また、スポイト容器に残っていた絵の具をリーダーがパレットに継ぎ足しているのを見ていた子どもたちは、直接スポイト容器からのドリッピングを試み始め、スポイト容器から勢い良く出る色の様子やその描線を楽しんでいた。

パラバルーンの白い部分が次第にカラフルな色で埋まってくると、子どもたちの活動の勢いも開始の頃より落ち着いてきた。（図5）そしてパラバルーンの取っ手のあるところに子どもたち自身



図1



図2



図3



図4

で油性マーカーペンを使って手を型取り，活動に参加した証明として自分の名前を記すことにした。手型の痕跡と名前を残すことで，この描画活動の収束として目で見える分かりやすい方法となった。(図6)

〈パラバルーン遊び(空気を捕まえる)〉

この遊び活動は全員でパラバルーンを大きく広げたり，丸く膨らませたり，空中へ舞いあげたりするなどダイナミックに空間を使う活動として，「仲間と一緒に遊び，人との繋がりを意識しながら協力してひとつの活動を行う」ことや，「空気を捕まえて，空気の動きや形を目に見えて感じる」こと，「大きなパラバルーンを扱い，遊ぶことで，解放感や満足感を感じる」ことなどのねらいがあった。

パラバルーンを使った遊び活動は2日目の午後，立体凧の凧揚げ活動の後に実施したが，子どもたちにはパラバルーン遊びについて皆が楽しく出来るように，次の約束事を守るように伝えた。「リーダーの話を注意深く聞くこと」，「リーダーの掛け声に合わせること」，「勝手にひっぱらないこと」そして子どもとリーダーが取っ手のある場所を確認しながら交互に配置につき，パラバルーン遊びの活動を開始した。



図5



図6

まずは、この活動担当リーダーの「うえー、したー、うえー…」という掛け声に合わせて、パラバルーンを同時に上下に動かす練習をした。ペインティングした大きな布が上下に動き、膨らむ様子を見て子どもたちは歓声を上げていた。子どもたちの中には、パラバルーンの下に潜り込む子どももいたが、何とか協力しながら、全員で一斉に動かすことができるようになった。

そして、「風をつかまえよう」というテーマのもとに、パラバルーンを上下に動かし、中に空気が充分に入ったところで布を地面に密着させパラバルーンを半球に膨らませる“おまんじゅう”という活動を試みた。再びリーダーが「うえー、したー、うえー…」と声をかけると、今度は子ども達も一緒になって「うえー、したー、うえー…」と声が出始めた。“おまんじゅう”は全員の息のあった5回目に成功した。(図7)

次に“おまんじゅう”の布を地面に密着させる際にパラバルーンの中に人が入り込む“あんこ”を作った。今度はリーダーが「いーち、にーい、さーん」と声をかけ、「さーん」で一斉に布の中へ入ることを試みた。次第に全員で息を合わせてタイミングが計れるようになり、これは3回目で成功した。半球状に膨らんだパラバルーンの中に入った瞬間に全員が一体感を持つことができ、しばらく内側からバルーンを眺

めた子どもたちからは、「いちご農園みたい」「いろんな色が見える」という感想が聞かれた。(図8)

バルーンを膨らませたり、縮ませたり、カラーボールを跳ねさせたりする中で、数名、興奮し走り回ったり、バルーンの下に潜り込んだりしてみんなで遊ぶことから外れる子どもが出たが、スタッフはバルーンの上に乗ってしまう行動のみ制止し、それ以外は見守って、できる限りバルーンを動かして空気を捕まえること、空気の形に焦点を当て楽しむことに集中した。走り回ったり、バルーンの下にもぐったりしていた子どもでも、バルーンを操作している仲間やスタッフの姿を見て、また自分の持ち手に戻ってくる様子が見られた。



図7



図8

この遊びを通して、「空気の抵抗が大きい」という子どももいて、体の小さな低学年の子どもたちにとっては力のいる活動になったようだ。しかし、空気の大きさや空気の強く流れる力を子どもたちが体全体で感じている様子を見ることができた。

〈パラバルーン遊び（カラーボール・ポップコーン）〉

次に、カラーボール（直径8 cm）を使った遊びを行った。カラーボールを子どもたちとスタッフに1個ずつ渡し、描画の最初に球カプセルを投げ入れたときの要領で一斉にパラバルーンの上にボールを投げ入れた。そしてパラバルーンを上下に細かく動かしながら、ポップコーンのようにカラーボールを跳ねさせたり、また各班のリーダー全員でパラバルーンを持ち、子どもたちは布の下に入って下からボールを跳ね上げたりした。パラバルーンの動きによって跳ねるカラーボールを目で追いながら、パラバルーンを動かしたり、下に潜ってジャンプしたりしている子どもたちの様子を見ることができた。（図9、10）

〈活動の終息と片づけ〉

最後にカラーボールを一人一つ持って収納袋に入れるように指示し、同時に年齢の大きい子どもには手伝いをお願いし、パラバルーンを丁寧に折りたたむなど、ゲーム感覚で楽しみながら片づけをしてパラバルーン活動を終了した。

2. 「立体凧」活動

（1）計画と準備、活動内容

立体凧の制作と遊びの活動は、パラバルーン活動のように全体でひとつになる遊び活動の展開ではなく、各グループでの集団造形活動となる。ただ、他のグループの表現やグループ内でお互いの表現を見ることにより確認と開発を意識的に行いながら自分の表現を探して行くこともねらいとなる。さらに自分がこだわって描画した作品が仲間の作品とつながり、一つの造形物となり、空に舞い上がり大きな空間のなかにあることで日頃の閉塞感から解放されることにもなる。また、仲間と協力して凧を揚げることを通じて、お互いに意思疎通を計りながら相手の意図を読み取り協力するという社会的スキルを育み、さらに、達成感や楽しさ、チャレンジ精神を仲間と共有していくことも経験することができる。

素材の選択は描画表現に適していながら、軽くて強度もあるものとして「ダンプレート」、[板段ボール]、[発砲スチロール板]の3種類が考えられた。それぞれの素材で1/2の立体モデルを試作し屋外での揚げる実験をスタッフで行った。組み立ての仕組み、揚げ紐の長さなどの条件は3種類とも同じである。風を受けて浮力を持ちながら揚がったのは、一番軽い「発砲スチロール板」による立体凧であった。と同時に強度については一番弱く、揚がって落ちた場合にその衝撃の強さによっては破損し、脆いことも証明された。他のふたつの素材については、強度はあったがイメージ以上に重く、風の浮力を受けて浮き上がる様子が見られなかったことから、立体凧のベースになる素材は強度も考慮した1.5 cm厚の「発砲スチロール板」に決まった。

立体凧の描画活動に使う用具材料は、「発砲スチロール板」に描けるものとして、油性マーカー



図9



図10

ペン各色をグループ毎に用意し、他にカラークラフトテープ、カラー布テープ、カラーポリテープなどの貼り付けられるものを準備した。

（2）「立体風」の活動経過

個別の描画装飾活動とグループ単位で立体風に組み立てるまでの制作作業は2日目午前の活動として、屋内施設（大ホール）の広い床面でおこなわれた。「発砲スチロール板」（120 cm x 180 cm x 1.5 cm）は一人一枚としたが、子ども一人には大きすぎるくらいの表現のフィールドになった。「発砲スチロール板」は潰れ易く壊れ易いことから、床に置いた板の上にはなるべく乗らないようにという注意を喚起しながらの描画活動になった。

〈立体風制作（描画活動と組み立て）〉

当初、「発砲スチロール板」の表面の感触に戸惑っていたが、子どもたちの柔軟性はすぐにその質感等に対応し、それぞれが得意にしている描画活動に取り組み始めた。広いフィールドの片隅にこだわりのある絵を描いていた子どもや、テープを貼ることでその広さに対応していた子ども等、彩色に於ける発砲スチロール素材との相性の悪さと危うさを感じながらも積極的に制作に取り組んでいた。また、ポスターを使った最初の説明から「風上げ」をイメージした子どもは、その表現が空間や風を意識したものになっていた。（図 11、12）

そして、こうした特別な素材へのアプローチやグループでの組み立てを前提にしたものから生まれる表現は、新鮮な効果として子どもたちに貴重な体験をもたらすこととなった。それは自分のこだわりを抱えながらも協同性の方向に一歩踏み出して互いの表現が纏まり、ひとつの立体を形成していくという達成感にまで繋がっていくこととなった。

組み立ては、各グループ内で3枚の「発砲スチロール板」を長辺同士、布テープでしっかりと繋ぎ三角柱の立体にした。そして上方ひとつの角に竹箸をしっかりと布テープで固定し、5 cm 位出している竹箸に揚げ紐を固く結んだ。そしてここが立体風を揚げるための支点になった。（図 13）

〈立体風制作（コンテスト）〉

全グループの完成した立体風が並んだところで、他グループの作品を鑑賞することの意味を含めてコンテストを行なった。「よく飛びそうで賞」「グッドデザインで賞」のシールを一人に3枚ずつ配り、自分のチーム以外の風に投票することにした。投票の前に、各グループで作品の簡単な発表を行い、各自、どの作品に投票するか考えながら発表を聞いた。その後、自由に作品を見て回り、ひとりひとりが気に入った作品や注目した表現にシールを貼っていった。（図 14）スタッフにも配っておいだ投票シールでのカバー含めて、どの子の作品もシールが貼られて票を獲得できるように配慮した。「よく飛びそうで賞」と「グッドデザインで賞」をグループ毎に総計したシールの数で「総合優勝」が3グループ選ばれたが、受賞しなかった班でも“悔しい”“残念”などとをこぼす子どももいたが、シールでたくさんの投票を得られていたことから、班のリーダーとともに喜びあうことができた。

〈立体風遊び（風揚げ）〉

2日目の午前中にグループ毎に組み立て、それぞれの表現が詰まった三角柱の立体風を昼食後の



図 11

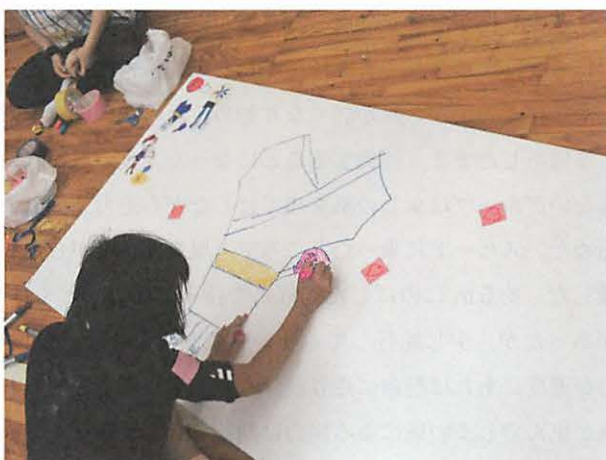


図 13



図 12



図 14

午後に屋外へと持ち出し広場で揚げることにした。室内で制作した大きな立体凧を部屋から持ち出し、カーブの強い階段を上って屋外まで運ぶことは、グループの仲間で声を掛け合いながらの協力を必要とした。また屋外では風に煽られた場合の対処も重要であった。凧を草芝の上に置いたまま、凧揚げ遊びの説明を続けていたところ、弱い風でも飛ばされそうになったことがしばしばあった。

立体凧の揚げ方や注意として、揚げ糸は徐々に伸ばしていくことや、布テープでの修理の方法などを教示した後、用意してきた見本となる三分の一の大きさの立体凧を使って、揚げ方の見本を子どもたちに見せた。風を読み、風の吹いてくる方角に向かって走りながら効率良く揚げる方法を示した。

まず始めにグループのメンバーのなかで揚げ糸を持って走る役目の順番を決め、他のメンバーは

立体凧が少し揚がるまでは凧を支えながら一緒に走っていくように呼びかけた。できれば落ちてきた時にも受け止められるように揚がった凧に付き添って走ることも伝えた。

しかし、この頃から風が弱くなり始め、風の吹いてくる方向も読みづらくなり、各グループとも走る準備をしたまま、待機することになった。良い風が吹かないままに待機が続いていたが、待ちきれないグループは少しの風を当てにしながらいきなり走力で揚げようと、メンバー全員で風に向かって走り始めた。スピードに乗ったところで、凧を支えながら走ってきた他のメンバーが声を合わせて凧を離した。約5mにのびた揚げ糸を持って走る子どもはスピードを落とさずに走り続ける必要があったが、少し蛇行してしまい、糸が緩んで3m位揚がっていた凧は揚力を失って失速した。風力が適度にあれば懸命に走り続けなくても、揚力を得られて楽に揚がる場所だが、午後の広場は風が止んでしまい風による揚力は期待できなくなっていた。

どのグループも微風に向かって走り始めたが、時折少しの向かい風と子どもの走る力の組み合わせがうまく合致し、支えて走る他のメンバーを含めて全員の呼吸があったグループは、立体凧が風のなかに浮いて揚がった感触を得ることが出来た。（図15）走る子どもの順番を変えながら、風に向かって幾度も試みている様子が広場のあちこちで見られ、同じように少し揚がったグループからは歓声が聞こえた。走るのが苦手な疲れやすい子どもも一緒になって走る様子も見られ、全員が夢中であった。



図 15

揚げ糸を持って走りたい意欲を誰もが見せていたが、その役目が一巡した辺りから全員の疲れも見え始めた。立体凧に付き添って走り、凧が落ちる時に丁寧に受け止めると凧も無事だったが、揚げ糸を持って走る子どもの走力メンバーが追いつかない場合、凧は地面に衝突して部分が割れたり、角が欠けたりしてしまった。前方に向かい夢中で走る子どもは凧が落ちてもすぐに気付かず落ちたまま引きずり、メンバーから大きな声を掛けられていた。

立体凧は壊れやすいことや、巨大なので揚がらないこともあること、割れた場合は布テープで修理ができることなどを凧揚げの事前に説明し予測をさせていたので、壊れてしまうことやうまく上がらないことで、あきらめてしまったり、パニックになってしまったりする子どもはいなかった。それでも子どもたちは凧をテープで修理しながら、飽きることなく凧を空中に浮かし続け、遅く夢中であった。凧上げ遊びの収束は、立体凧がかなりのダメージを受けてからのこととなった。

IV 総合考察

子どもたちに対しては個別の対応にも柔軟性を持ち、集団行為の結果を求めての強い促しや制限を強いるのではなく、子どもの側からのアプローチや興味を持ち始めることを受け止め、こだわって熱中することを尊重していくことも、スタッフ間の共通認識として持ち合わせることでできた。そのことがあって、個の表現から集団造形へとプログラムを展開することができ、子どもたちに満足感と達成感を味あわせることができたと思われる。事後のアンケート結果や保護者との面接では、どの子どもたちも楽しかったこと、チャレンジできたことなどを家庭に持ち帰り親に感想を述べており、次年度も継続を希望するとのことであった。この結果からも、本プログラムは参加児童に対して一定の成果を得られたといえよう。

2日間に亘る活動を無事に終えて、造形活動の内容とながれにいくつかの課題を見出すことができた。当初計画していたパラバルーン遊びの中で、布を空中に大きく膨らませてパラバルーン自体を舞い上げる活動が成功しなかったことについては、素材そのものに課題が残った。綿布についての強度は適正であったが、空気の流れが生む浮力に対してはその重さが足枷となってしまった。

また、制作活動後や遊び活動後の片づけ、運搬などはスタッフにとってハードな作業になったが、何とかこなすことが出来た。移動の際に運ぶ物品などへの対応や片付け等については、活動のながれの中に組み込むことも出来ていたが、様々なかたちで予測していた以上に片付け作業の必要性が出てきたことから、時間の余裕がなくなってきた場面も時折見受けられた。造形活動においては片付け作業を含めて活動の一環として組み込むことが理想であるが、そうした片付け作業を子どもたちの参加活動として一連のながれのなかでどのように組み込んでいくかが今後の課題となってくる。

今回のサマースクール活動のエリアは、屋外を含めた広い範囲であることから活動場所、天候、施設の共有等、様々な場面に配慮しながら綿密な計画を立てて実施していくことが必要であった。そうした予測と準備が十全な上で現場においては、より柔軟な対応や思考が必要であると感じている。

「自閉症スペクトラム障害の児童への造形活動の実践（Ⅳ）」

この活動の翌年には、K市の通級指導学級の先生方と共同で、通級児童に向けた造形活動を行い、地域や教育への展開も試みた。活動の提供者として、今回のような大きな活動ができる機会を通常の教育のなかにどう組み込んでいくか、どんな形でアプローチしていくのか、という点も学校教育の文脈の中で考えていかなければならない課題であろう。

謝辞

第4回の造形と遊びのサマースクールに参加し、多大なる示唆を与えてくれた子どもたちとその保護者、子どもたちを紹介してくれた狛江市及び小平市の通級指導の先生方に大変感謝いたします。また、9名の学生スタッフは準備計画の段階から携わり活動を支えてくれました。特に、大学院生福地弘美さんは2008年初回から活動に参加し、安田と岡田を支えてくれました。謝意を表したい。

文献

- 安田悟・岡田智・山田薫（2009）：広汎性発達障害の児童への造形活動の実践—表現と共同作業を促す図画工作活動。共立女子大学家政学部紀要，55，121-132。
- 安田悟・岡田智（2011）：広汎性発達障害の児童への造形活動の実践—表現と集団活動を促す造形と遊びのサマースクール。美術教育 No. 294，106-107
- 安田悟・岡田智（2012）：自閉症スペクトラム障害の児童への造形活動の実践Ⅲ—表現と集団活動を促す造形と遊びのサマースクール。美術教育 No. 295，144-145